talk! talk! talk! プロサーファー、俳優・中村竜さん

プロサーファー、俳優

中村竜さん

俳優、そしてプロサーファーとして活躍をする中村竜さん。生まれ育った鎌倉でサーフィンに出会い、現在も鎌倉を拠点に世界中を旅している。写真を撮り始めたのは10年ほど前。サーフィンを通して自然の美しさや偉大さに触れ、その姿を写真に収めて家族や友人に見せたいと思いカメラを手にするようになったのだとか。今回は中村さんの地元、鎌倉の海を背にしながら、写真の魅力をたっぷりと語っていただいた。

プロフィール

なかむら・りゅう。1976年、神奈川県鎌倉市生まれ。中学1年生の頃から地元、鎌倉でサーフィンを始め、ジュニア部門などで活躍する。1993年にCM「キリンレモンセレクト」に出演、それをきっかけに1994年にドラマ「アリよさらば」で俳優デビュー。以降、「白線流し」「ボーイハント」などに出演。
一方、サーフィンでは1999年NSA全日本選手権5位、JPSAアマチュア3位になり、2000年にはプロテストに合格、翌年から鎌倉を拠点にプロサーファーとして活躍。日本をはじめハワイ、タヒチ、モントーク、ニュージャージ、インドネシア、ヨーロッパなど世界各国に渡ってフォトグラファーとともにサーフトリップを続ける。昨年1月に結婚し、春にはお子さんも誕生予定とプライベートとともに充実の日々を送る。
写真を始めてからは自身も旅先でカメラを持つようになり、2006年5月には世界各地で撮影された写真展「entrance」を開催。同年11月には東京で、2007年1月には京都で写真展を開催し好評を得ている。

Beginning 出会い

世界中を旅しながら出会ったカメラ ニコノスV

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

10年くらい前だと思います。もともとずっと写真には興味があったんです。俳優をしているときもプロサーファーになってからも写真を撮られる機会が多くて、特にプロサーファーになってからはフォトグラファーと一緒に世界中を旅するんです。いつもカメラは身近にあったのでよく触らせてもらっていたし、フォトグラファーが撮影したものが作品になって雑誌に載るのをいつも目の前で見ていたので、自然と自分でも撮るようになっていたんです。

フォトグラファーがサーファーと一緒に世界中を回るんですか？

ええ、サーフィンの写真を撮るフォトグラファーです。カメラを持って泳いでいったり、ボディボードでサーフィンのポイントまで近付いてカシャカシャ撮るんですよ。さっき取材前にそこで挨拶していた人、フォトグラファーの横山泰介さんなんですけど、彼ともよく一緒に旅をしたりして。

そうだったんですか。偶然いらっしゃったんですか？

泰介さんもこのあたり（取材場所の鎌倉あたり）の人で、さっきたまたま通りかかって。カメラもね、これと同じの使ってるんですよ。使うならこのカメラがいいぞって勧められて、周囲のいろんな人からも勧められて買ったんです。カメラの構造がすごくシンプルなので絞りなんかの勉強がしやすいし、なにより壊れないのがいい。水をバシャバシャかけて洗えるし。それに見た目もかっこいいですよね。色は他にもオレンジがあったんですけど、僕はこっちの方が好きで買った当時からずっと使っています。この質感は他のカメラにはないですよ。手にフィットするし。

ニコノスVのモスグリーンですね。

はい。撮り方については周りの人に聞いたりもしましたが、あとはとにかく片っ端から撮りまくってましたね。動物と海が好きだったのでそういうものを撮ったり、旅に行くときは旅先での出来事を撮ったり。家族や友だちにこういう旅だったんだよって写真を見せたりするのが好きだったので、自分が興味を持ったもの、美しいなって思った瞬間、それを撮っては人に見せるっていうことを繰り返していました。
何か目的を持って撮るのではなく、いつもカメラを持ち歩いていて「あ、いいな」って思ったものを撮ります。美しいって思ったものかもしれないし、動物だったらかわいいって思ったものかもしれないし。それは今も変わらないんですよ。自分が心動かされたものを撮っています。

もちろん水中でも写真を撮られているんですよね？

もちろん撮りますよ。サーフィンの写真を撮るときはボディボードでポイントまで行って撮る場合もあるんですが、ハウジングかついで身体ひとつで泳いで行って撮ることが多いですね。そうすると自由に動けるから撮りやすいんです。すごく近くまで寄って撮るんですよ。ぶつからないように、でもぶつかっちゃうときもあるくらい。
あ、この写真は水中で撮ったものですよ。波の裏から撮影したものなんですよ。

今回持ってきていただいた写真ですね。

波が上を通り過ぎていくのを、水中の中から泳いで撮ってるんです。水中から陸が見えているんです。水の中から見る世界、綺麗ですよね。このアングルから友だちが波に乗っている姿を撮ったりもするんですよ。そのシルエットが凄くワイルドで、そういうカットを撮影したりもします。

Pleasure 楽しみ

自然と波長が合ったとき 計算外の美しい写真が生まれる

その他にも何枚か写真を持って来ていただきました。

今回の写真はすべて南西諸島で撮ったものですね。よく波乗りに行く場所なんですよ。この朝焼けの写真は自分でもすごく気に入っている写真で、ここはすごくパワーを感じる場所なんです。この日は朝早く目が覚めてしまって、夜が明ける前からずっとこの場所にいて朝日が昇る瞬間を見てたんです。ほんとにすごく綺麗なんですよ。それから、こっちはハイビスカスをスコールが通り

過ぎた後に撮ったものなんです。水滴があちこちについていて、かなり寄って、わざとぼかしてやわらかい感じに撮ったんですよ。

写真を撮るときはありのままを撮影するというよりは、被写体に合わせて絵づくりをされる方なんですか？

絵づくりをしているというよりも、自分が心地いいなと思う感じをそのまま出しているというか、何となくこうしたいと思うように撮るという感じで……。ハイビスカスの写真も、たくさん雨が降ったあとにパーッと晴れたんですよ。それで、空気が熱せられてボワーッと湯気がたっているような雰囲気だったんです。そのときの空気を感じていたから、パキっと撮るよりもボヤっとした感じがいいなと思って。
その他にも、これは砂浜に落ちていた空きビンをマイクロレンズで撮ったものなんですが、ただのゴミなんだけどすごく綺麗で、綺麗なのにゴミで、それがなんだか可哀相だなって感じながら写真を撮りました。きっと、自分の中では1枚ずつストーリーがあるんですよね。

船に乗っている写真は、サーフィンのポイントに向かうところでしょうか？

そうです、そうです。仲間とまだ暗いうちから船で出掛けていくんですよ。いい波に出会えない、当たりの波が来ないことも結構ありますから、今日は波が来るか来ないか、ポイントに着くまでみんなでドキドキしたりしてね。もちろん気候や季節を考慮して、経験からポイントを決めては行くんですが、待っても待っても当たらないときは当たらないし、たまたま行ったら当たったということもある。波って、当てようと思って当たるものではないんですよね。

「最高の波は一生に1度出会えるか、出会えないかだ」というような話を聞いたことがあるんですが、それは決してオーバーではないんですね。

ええ、オーバーではないです。それぞれ好みの波は違いますし、そのときのシチュエーション、モチベーション、そういった要素もあるので自分にとってベストな波に出会えるというのは本当に限られてくる。たまたますべてのタイミングが合えばという感じで、計算できるものではないです。

そういう意味で言うと写真はいかがですか？サーフィンよりは計算して撮影することができるのでしょうか。

いや、写真もまったくできないですよ。だから、写真とサーフィンにはすごく共通点があるように感じますよ。僕は素潜りも趣味でやるんですが、素潜りともすごく似た部分があって、だから写真にも惹かれるのかなと思うんです。うまく言葉で説明できないんですけど……何かこう、似てるんですよね、自分の中で。

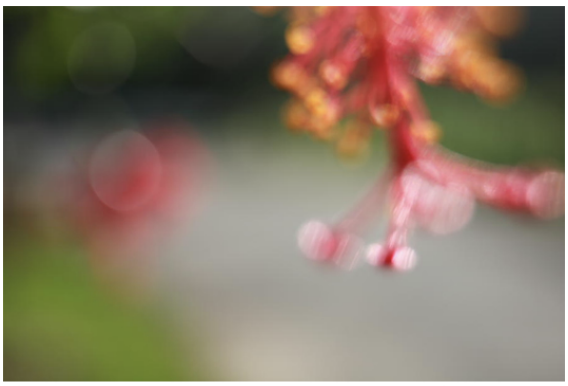
計算できないという部分が似ているということでしょうか？

うーん。計算というよりは巡り合わせだと思うんですよ。サーフィンも素潜りもそうなんですが、自然が作り上げたものに巡り合うような感覚なんです。写真も同じように、感動するものに会えていい写真が撮れた、それはたまたま巡り会えた、タイミングが合ったということだと思います。自然と波長が合ったときに撮れるような気がするんです。そういう部分が似ているからこそ写真にもハマっているのかなと思いますね。

Photo's 作品紹介

南西諸島へサーフトリップ 心動かされた瞬間を切り撮る

1 南西諸島にて



2 南西諸島にて

3 南西諸島にて

4 南西諸島にて

5 南西諸島にて

6 南西諸島にて

7 南西諸島にて

Future これから

素晴らしい被写体に出会うこと それは自然からのギフト

中村さんが思う、写真の一番の魅力はどんなところだと思いますか？

自然の表情を伝えられるところ、それから人に喜んでもらえるところです。波を求めて旅をする過程の中で、自然の綺麗な表情、素晴らしい表情にたくさん出会うんです。それを写真に撮って人に伝えられるということ、またそれを見た人が何かを感じてくれて、喜んでくれたり自然に興味を持ってくれたりするとすごく嬉しいなと思います。
たとえば波の写真にしても、近くで見たり、裏から見たり、横から見たり、そうしないと波ってどんな形をしているのか意外とわからないですよね。だから写真に撮って、裏から見るとこうですよ、波を通して陸はこんな綺麗に見えるんですよってことを、自分たちが普段見ている視線を写真を通してみんなに見てもらえたらいい。それで海に興味を持つでもいいし、水に興味を持つでもいいし、そういうのが嬉しいですね。

自分で見たものを写真に残しておくだけでなく、それを伝えたい、見てもらいたいという意識で撮影しているんですね。

そうですね。昨年から今年あたまに写真展をやったんです。いろいろ感想を言ってくれたり、質問をしてくれたり、とても面白かったですね。またぜひやりたいと思っています。そのためにも、これからガンガン旅しないとな（笑）。

自然だけでなく東京のような都会で撮ってみたいと思ったことはないんですか？

うーん、自然と対極的な、すんごく機械的な写真なんかは面白いかもしれないですね。でもなかなか都会で写真を撮りたいという気持ちになれないんですよ。心を動かされる瞬間っていうのはやっぱり自然だから。夜景などは見ていて綺麗だなと思うんですが、自然の中で感じる綺麗さとはまた違う種類の綺麗なんですよ。綺麗は綺麗でも全然違う。僕は自然寄りの綺麗が好きなんです、たぶん。

具体的にどこか撮影に行きたい場所はあるのですか？

それはまったくないですね。撮りたい被写体があったとしても、波と一緒でそれにうまく出会えるとは限らない。だから、いつ出会っても撮影ができるようにいつもカメラを持って旅をすることが重要です。
思い返してみると、カメラを持っていないときに限って綺麗な自然に出くわしたりすることが多かったんですよね。サーフィンもそうで、板とスウェットスーツがないときに限って海に行くといい波だったとか。あぁ、やっちゃったーって（笑）。そんなもんなんですよね、ほんとに。すべてはタイミングなんだなぁと思います。

素晴らしい被写体に出会えたらラッキーっていう感じですね。

はい。でもラッキーというよりもそれはきっとプレゼントだから、出会いは自然からのギフトだと思うんです。だから、ギフトをみんなでシェアできるように、今後も写真を撮り続けて行きたいです。

コンテンツトップへ戻る

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社ニコン 映像事業部
株式会社ニコン イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.